月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 25 年目

創刊 1989 年　No. 285
2013年 3月号

Dirck van Delen（1605 Heusden - 1671 Arnemuiden）　Großer Gartenpalast, 1640　Leinwand　162 x 286 cm　© Kunsthistorisches Museum Wien　美術史博物館『ANSICHTSSACHE #4』より

杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 18

昨年の九月十九日、福島第一原子力発電所事故後の我が国の規制で大きな動きがあった。原子力規制委員会が環境省の外局として発足したのである。ウィーンに本部のある国際原子力機関や事故調査委員会などからの提言に沿って、我が国の原子力規制を原子力推進とは完全に独立し、旧原子力安全・保安院と原子力安全委員会の事務のほか、文科省や国交省の規制関連事務も含めて原子力規制委員会に一元化したのである。国家行政組織法第三条に基づいて設置された行政委員会として、内閣からの独立性は高い。委員会は、田中委員長、島崎委員長代理、更田委員、中村委員、大島委員の五名より構成され、原子力に対する確かな規制を通じて、人と環境を守ることが委員会の使命としている。委員会の事務局として原子力規制庁が同時に設置され、そのトップに池田長官が就任している。

委員会の主な活動は、原子力安全のための規制・制度の見直し、規制の実施、モニタリング、防災対応、国際対応などである。規制・制度の見直しでは、発電用原子炉の新安全基準、原子炉施設の地震・津波に関わる新安全設計基準、新安全規制の制度整備、原子力災害事前対策、緊急被ばく医療、緊急時モニタリングのあり方、及び福島事故による住民の健康管理のあり方に関する検討が昨年十月より進められている。原子炉の新安全基準では、福島事故の教訓や最新の技術的知見、海外の規制動向を踏まえ、検討チームが策定した新安全基準骨子案に対し、二月六日～末日まで意見を募集している。筆者は、新安全規制の制度整備に関する検討チームに外部専門家として参加している。我が国の原子力安全のために微力を尽くすつもりである。

検討チームの更田委員と外部専門家 © 原子力規制委員会

さて、今月のウィーンと京都の類似点では、両市の北方の山から観る景色について述べてみたい。ウィーンでは、地下鉄U4の終点ハイリゲンシュタットからバスに乗って約二十分でカーレンベルクの丘に着く。広い駐車場と小高い丘にはレストハウスと中世のレンガブロック造りの展望台がある。この展望台から眺めるウィーンの景色は素晴らしい。手前にウィーンの森が広がり、葡萄畑も見える。左にドナウ川が大きく流れ、右側はウィーン市街を一望できる。ここからは、ハイキングコースが整備されており、空気のおいしいウィーンの森の中を歩くことが出来る。

一方、京都市の北東にある大文字山には、銀閣寺の門前の登山口からゆっくり登っても約四十分で山頂に着く。山頂から見る京の街のパノラマは絶景である。手前の吉田神社から、御所、下鴨神社と緑豊かな光景が眼前に広がる。八月十六日夜の五山送り火では、最も雄大な大の字がここに点火される。大の字交点の最大火床を含め火床は全部で七五、薪六百束、松葉百束、麦ワラ百束が使われると言う。カーレンベルクの丘の標高は四八四メートル、大文字山は四六六メートルと極めて近く、どちらもハイキングコースとして市民に親しまれているのも似ていると言えよう。

余談であるが、筆者がウィーンに赴任中、日本からのお客さんをよく車でカーレンベルクの丘に案内した。展望台からのウィーンの眺めには誰もが感嘆した。また、大学のアイスホッケー部に所属していた一回生の時、練習で鴨川から大文字山頂まで走って競争し、二十数人の中で二位になったことがある。今年の一月十二日に四四年振りで大文字山に家内と登ったが、さすがに頂上では息が上がった。若い時の体力はないが、両市のパノラマを一望して比較できた幸運に感謝しつつ、カーレンベルクの丘からの眺めを描いたスケッチを掲載させて頂く。

■ 杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■